

開講の辞

宗祖親鸞聖人の七百五十回御遠忌法要を明後年に控えた今夏、はからずも山命を蒙りまして、『唯信鈔文意』を講本に頂き、懸席の各位と共に宗祖のみ教えを学ばせていただくことになりました。まづもってそのことを深く感謝いたします。

『唯信鈔文意』は、聖覚法印の『唯信鈔』に引用されています教証としての証文について、宗祖自身、念仏往生を願う「いなかのひとびと」に易く心得させようとなされて、晩年に釈されたものがあります。本書は、その題号からしても、形式からしても、聖覚法印の『唯信鈔』の注釈のような形をとっていますが、内容は決して単なる注釈ではありません。その意味では、『唯信鈔』の釈文ではなく、香月院深励師が、『唯信鈔文意録』で申されますように「唯信鈔文」の釈意、つまり、引用されている証文の釈意であります。

『唯信鈔』は和語で書かれており、「仮名選択集」的な内容であります。親鸞聖人はその中の証文、十文を取り上げて、それに対して極めて独創的な理解を示しておられます。それは、まさしく本願・

他力という視座に立った理解であり、その視座を持たない者には、極めて非常識で破天荒な解釈と受けとめられるでありましょう。現に、これまでも鎮西系の講録には親鸞聖人に対する厳しい批判さえ記されています。

まさしく、その視座は本願・他力であり、親鸞聖人はそのこと自体を、「この本願のやうは『唯信抄』によくくみえたり。『唯信』とまふすは、すなわちこの眞実信樂を、ひとすぢにとるこゝろをまふすなり。」(『尊号眞像銘文』)とか、「如来の弘誓をおこしたまへるやうは、この『唯信抄』にくわしくあらわれたり。」(『唯信鈔文意』)と、明言しておられます。したがって、「眞実信樂をひとすぢにとるこゝろ」こそが「一心」であり、「唯信」であります。選択本願念仏を高らかに掲げて、「涅槃之域には信を以つて能入となす」(『選択集』)と示された法然上人の立場を、「往生浄土のみちは、信心をさきとす」(『唯信鈔』)と聖覚法印が述べられました。さらに「涅槃之眞因は唯信心を以つてし」、「正定之因は唯信心なり」(『教行信証』)と親鸞聖人は領解されています。選択本願を「唯信」「一心」「正信」「大信」と受けとめたところに大般涅槃道が成就していったのであります。

親鸞聖人は『唯信鈔』に「本願のやう」を学ばれました。そして、その証文の他力的理解とそれまでのその各文に対する一般的(自力的)理解の違いそのものに『唯信鈔文意』の特異性があるのであります。その意味では、そこに親鸞聖人自身の本願に目覚めた軌跡、あるいは、自力から他力への回

心の跡を学ぶことができます。

「唯信」とは、「本願他力をたのみて自力をはなれたる」(『唯信鈔文意』)と本書に示されています。それはまさしく回心を意味する言葉であります。

具体的には、『唯信鈔文意』にみられる選択から唯信へ、来迎から摂取へ、自力の「若少一心」から他力の三信心へ、本具の仏性から他力の信心仏性へ、自力眞実から利他眞実へなどの教義的展開の一つ一つが、そのことを如実に示しています。それこそが「よく瓦礫を変じて金となす」回心の内実であります。その意味では『唯信鈔文意』とは我ら瓦礫の者がよく金に変成(転成)されていく書であるといえましょう。私どもが平生、課題にしております「死と生」を問い、「死に應えうる生」に出遇うという課題(ビハラ)も、尽きるところは回心と往生の問題であります。懸席のみなさんと共に、内に我が身の生と死の課題をいだきつつ、「ただひとたびの回心」を期して、先学諸師の論説に導かれつつ、学んでまいりたいと存じます。

二〇〇九年七月十五日

田代俊孝